

かうの實などいふ、金谷、島田、水の上などまでおなじさまなり、いはしの頭は見えず、あたらしき箸を折て、かうの葉をまきて、ねぎをはさみて、戸にさすこともありといふ、松島の日記に、あすは年かへる日なりとて、松にしきみをたてそへと見えしもおもひ出らる、又藤枝のあたりは、ひらぎにしきみをそへたるも見えし、こよひは藤枝にやどる、そのやどりにて豆はやしす、○節西のをはりに、あやしのをのこ袴きて、煎豆入たる升を箕の内にのせて、あきの方にむかひ、鬼は外三聲、福は内三聲、一聲ごとに豆一まきづ、うちて、打をはれば、三方に紙しき、いり豆もり、ひらぎの枝そへてすへたり、所がらめづらかなる年の夜なりけり、

〔大江俊矩記〕文化十年十二月十五日丁丑、今日節分也、雖此節之儀、以祓邪氣、煎豆如形擲之、同上、但不發聲、奏觸也、尤年德棚不設之、一切家内祝儀堅固、令停止、只入夜煎豆喰之、而

已、○是歲閏十一月、後櫻町帝崩、

〔先哲叢談〕四伊藤維楨、字原佐、號仁齋、○中略

邦俗立春前一夕撒炒豆、高聲叫曰、福内鬼外、殆不類於兒戲乎、而仁齋必著禮服、行之家、其不好爲崖異者如此、

節分式停止

〔徳川禁令考〕三十嘉節〔慶應三卯年三月廿三日〕

御祝儀事御廢止之件々

河内守殿御渡

大目付江中略

節分 右祝儀御禮等御廢之事○中略

右之趣向々江可相觸候

三月

〔書言字考節用集〕二厄攘又云厄除

厄拂